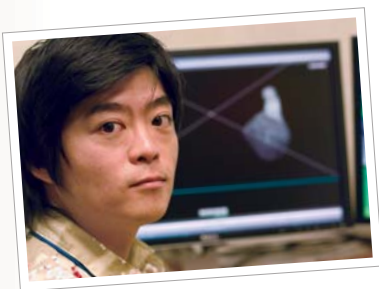


輝く、研究者たち

OB

海外ラボの変なところ



本稿では、私が海外留学中に体験したこと、見聞きしたことを交え、海外のラボの変なところを記そうと思う。

私は2007年の9月にユタ州・ソルトレイクシティー University of Utahの Gary Schoenwolf博士の研究室に赴任したのであるが、まず驚いたのが、ラボ内の空調がすごく効いていることであつた。ソルトレイクシティーの9月は日中40度近くなることもある。が、それを差し引いても冷え過ぎなのである。このラボ内で日本人(東洋人)は長袖の服

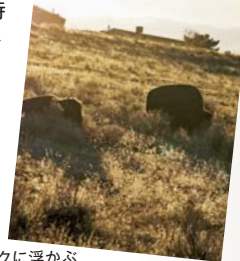
を着込み、口々に寒い、寒いと訴えている。一方、アメリカ人(白人)は鼻歌交じりに、快適そうにピペットをいじくっている。寒いから温度を上げていいかときいたことがあつたが、「ハンバーガーをたくさん食べろ」という何とも要領を得ない答えであつた。つまり、ジャンクフードをたくさん食べて太れば、脂肪で温くなるよということらしい。私が人種の違いについて強く意識した瞬間でもあつた。

人種の違いは生活習慣の違いにも影響するのだろうか?彼らの生活サイクルにも驚かされた。海外ラボの朝は早い。朝日が昇る前に出勤してくる人などざらにいる。しかも、朝っぱらから妙なテンションの高さだ。しかし、彼らのテンションもそう長くは続かない。正午を過ぎ、3時近くにもなるとそわそわし出す。もう帰りたいのだ。5時になるかなら

氏名 太田将 Sho Ota
現在の所属 Univ. of Utah, Dept. of Neurobiology and Anatomy
職名 Postdoctoral Fellow
大学在学時の所属 生殖発生分野

ないかの頃には、ラボ内はおろか、研究棟にも掃除の人たち以外は人っ子一人いなくなる。おかげで研究棟は軒並みロックされ、共通機器などほぼ全面停止だ。そんなに家路に急いでなにが待っているのか、と私はいつも思う。

ここに挙げたことなど些末なことである。あなたが海外留学を試みれば、もっと驚くような変なことに出くわすだろう。重要なことは、出くわした変なことに対していちいちストレスを感じないことだ。楽しむ余裕を持つこと、これが海外留学をやり多しものにする秘訣だと思う。



ソルトレイクに浮かぶ小島に住んでいるバツファロー

OB

ローザンヌ留学便り

私は昨年5月まで、COEリサーチ・アソシエイトとして勤務しておりました。現在、スイス連邦工科大学 ローザンヌ校(EPFL)スイス実験がん研究所(ISREC) Anne Grapin-Botton研究室に勤務しています。スイスに留学して、1年が経過しました。本当にあつという間の1年間でした。

発生研では、桑昭苑教授の指導の下、初期胚分化メカニズムについて研究していました。ISRECでも胚発生について研究しています。グローバルCOEでは、英語が公用語であり、数多くの英語での発表の機会をいただきました。そのトレーニングのおかげで、スムーズに研究活動を開始することができました。また、グローバルCOE内での競争的研究資金の獲得では、将来自立した研究者となるべく、自分自身で研究費を獲得する重要性を学び、この貴重な経



験が、海外留学助成金の獲得につながっています。桑先生をはじめ、ご指導くださいましたすべての先生に深く感謝いたします。

私が所属しているEPFLは、非常に国際色豊かな大学です。私の所属している研究室だけでもフランス、イタリア、スイス、韓国、日本人(私)が在籍しており、すぐお隣の研究室には、台湾、中国、インド、インドネシア、ブルガリア人が在籍しています。ISRECには、さらに世界各国から研究者が集結しており、多くの国

氏名 勝本恵一 Keiichi Katsumoto
現在の所属 スイス連邦工科大学 スイス実験がん研究所
職名 研究員
大学在学時の所属 多能性幹細胞分野

の研究者とdiscussionできる環境にいる私は、非常に幸せに思います。ローザンヌは、美しいレマン湖に面した、緑豊かな町です。治安も非常に良く、研究に打ち込むには、最適な環境です。EPFLのすぐ隣に、ローザンヌ大学(UNIL)があり、研究交流も非常に活発です。UNIL構内では、夏場になると羊を放牧しており、研究に疲れたとき、羊に会いに行くことが、私のひそかなマイブームです。皆さまのさらなるご発展を、スイスから心より祈念いたしております。



OB

Days Remembered



Time flies before you realize it. Almost half a year has passed since I left Kumamoto University, where I had studied and lived for five years. Beautiful city, clean streets, kind and thoughtful Kumamoto people plus academically advanced university, these are all the things freshly remembered and deeply rooted in the memory cells of my brain.

Instructed and supervised by professor Ken-ichi Yamamura, a very

friendly and considerate person, I showed much interest in the scientific exploration of transgenic mouse field. Believe it or not, I like these fast-moving inbred mice with different colors, and they are cute, naughty as well as lovely. Whenever "encountering" these little lively creature, my cerebral neuron cell seems to be stimulated and refreshed instantly in the sense that some new findings might be possibly derived from the ensuing experiments, and these data may contribute in improving the status of human health and quality life of human beings someday, somewhere in the future. Simultaneously, much "respect" coming from my heart was paid to these selfless, self-devoting little things since

氏名 王軍 Jun Wang
現在の所属 Dept. of Pathophysiology, Dalian Medical University College of Basic Medical Sciences
職名 Assistant Professor
大学在学時の所属 表現型クリニック分野

nothing could be accomplished without them...

This thing recalled above represents just a "glimpse" of my "memory-collecting pool" built up when I was in Kumamoto. Because of the limited writing space allowed here, I have to regrettably stop at this point. Hopefully, other memorable and interesting stories occurred during my stay in Kumamoto City will be continuously written out and published later on. These memory will always live and accompany me through my new life started in Dalian Medical University, P. R. China.

Kumamoto, the city of my dream... Long live our friendship, long live the two great countries.

OB

ブタと研究と私



皆さま、いかがお過ごしでしょうか?初めての方もいらっしゃると思いますので、簡単に私のことを紹介させていただきますと思います。私は、平成14年に内胚葉系幹細胞の研究を目的に、小児科学講座再生研究グループの大学院生(医学博士課程)となりました。そのころは田賀教授が発生医学研究センターのセンター長をされており、平成15年4月から平成17年までCOEジュニア・リサーチ・アソシエイトにご推薦いただき、さらに平成18年4月から平成19年まで日本学術振興会特別研究員にご推薦いただきました。

当時、iPS細胞は、まだ開発されておらず、胚性幹細胞や体性幹細胞がさまざまな論議の中で検討を重ねられていました。小児科学講座は、体性幹細胞の一つである唾液腺由来幹細胞をラットから分離したばかりでした。「唾液腺って、なんだ

それ」と正直思いましたが、主任教授である遠藤教授からは虚心坦懐に研究に当たるよう指導をいただき、実際に徐々に唾液腺の意外な能力に触れることとなります。私はヒトへの応用を目指すために、大型動物であるブタを用いた唾液腺由来幹細胞の分離と移植実験を担当することになりました。ブタをハンドリングするのは容易ではなく、明治大学農学部および九州農業試験センターのSPFブタの協力を得て研究が進められていきましたが、その後はブタとの格闘の毎日でした。ブタは知能が犬よりも高く、なれるとなつてじゃれてきますが、体重が熊並みである上に力も強く、何度も命の危機を乗り越えて、なんとか唾液腺由来幹細胞を分離に成功し、さらに唾液腺由来幹細胞からクローン豚を作り出し、糖尿病モデルブタおよび肝臓病ブタを作成して移植実験まで達成で

氏名 松本志郎 Shiro Matsumoto
現在の所属 熊本大学医学部付属病院周産母子センター
職名 助教
大学在学時の所属 小児科学分野

きました。毎年、夏に阿蘇で開催されるCOEサマー・リトリート・セミナーに参加し、海外からの留学生や他の施設の若手研究者と熱く語り合ったり、田賀教授や桑教授とカンファレンスをさせていただいたり、クイズゲームをしたり、夜はお酒を交し合ったり、本当に楽しい思い出がいっぱいです。現在は、医師としての仕事に戻り、毎日、肝臓病や膵臓病の患者さんを実際に治療しています。自分の研究歴の中でもCOE時代は本当に刺激的で楽しい思い出が多く、大切な財産をたくさん得た時期でした。私もそうでしたが目をキラキラさせて毎日を過ごし、たくさんのお話を学び、そして一流の研究者として巣立っていただきたいと思っております。期待しています。